

ふるさと観光マップ 長後めぐり 資料編その1 セツ木神社・諏訪神社コース (約6kmのコース)

長後駅 東口



昭和4年4月1日、江ノ島線開通と同時に開業。駅舎は現在地の東口で、駅名は「新長後駅」としてスタートしました。小田急は当初駅名を「長後」と発表しましたが、所在地が高座郡六会村大字下土棚であるため、土地の地権者の反対に会ったという経緯があります。

その後昭和17年には六会村、昭和30年には渋谷町(渋谷村は昭和17年に町制施行)が夫々藤沢市に編入されたため地権問題は消滅、また客から「新長後」では他に「長後」があるのか、との苦情があり、昭和33年から「長後駅」に変更されました。昭和42年には、東西を結ぶ橋上駅舎に改装、西口からも乗降できるようになりました。

花と緑の長後遊歩道 (通称 **ハタカン**) 畑地灌漑用水 東幹線用水路



神奈川県中央相模台地は、北は相模原市より南は藤沢市に至る「八里橋なし九里の土手」ともいわれた丘陵で古くから水なき台地と呼ばれた。作物は天水に頼るのみで、ひとたび日照りが続けば被害を受けることが多く、その生産性は低かった。

県営相模原畑地かんがい土地改良事業は、相模ダムを水源として、三市三町二七〇〇^{かんがい}の畑地にかん水し、地域農家の経営を改善すると共に、時代の要請であった食料の増産に寄与するため昭和二三年に起工された。本工事は県営事業の共同溝水路、東西幹支線、排水路工事を十六ヵ年の長年月をかけて、昭和三十八年度に完成をみた。戦後における本県農業の画期的大事業として、多額の事業費と長い年月をかけて施工された相模原畑地かんがい事業は、その後時代の返還とともに情勢が一変し、相模原市、大和市および藤沢市の三市に所在する用水路施設は、大部分が遊休化の状態となり昭和四十五年に畑地灌漑用水路の跡地利用に関する要望書が県に提出された。長後地区の跡地は現在、花と緑の長後遊歩道として利用されている。

東勝寺



宗派は臨済宗(円覚寺派)、山号は点燈山、創建は不明だが元弘3年(1333)5月執権北条高時が新田義貞に攻められ、鎌倉東勝寺の裏山で一族が自刃し果てたので、1300年代にこの寺が移されたものと伝えられる。開山は秋雄和尚、本尊は阿彌陀如来。慶長年間の初期(1596~)山門を残し、全焼したので慶長14年(1609)没の天遊和尚により中興された。関東大震災で本堂が破壊した為、大正13年(1924)本堂など復元した。平成9年浄財により本堂・拝殿を改築、山門を修復した。

セツ木神社



祭神は、源頼朝の父、左馬頭義朝。旧セツ木村の鎮守であり、古くは鯖明神社と言われ、明治初年にセツ木神社と改称されました。境川や引地川流域に点在する「サバ神社」12社の一つです。創立年は不明ですが、文政9年(1826)に再建され、大正13年(1924)には拝殿が改築されています。(「サバ神社」には、左馬・左婆・佐波・鯖等の字が当てられています)

この社の鳥居は木造で「両部型」と言われる珍しいものです。

大山道標



大山道の辻にあります。正面に「大山道」、右側面に「戸つか道」、左側面に「ふじ沢」、年代不明。この道は、宝永(1704~1711)以降の大山道と言われています。元大山道は、境川を千束橋(廃橋)で渡り、桔梗台庚申塔から滝山街道と宿上分^{やぶはなじゆく}で交差し、長後天満宮の前を引地川に下り、鐘ヶ淵橋を渡るルートです。本道が新大山道となったのは、長後宿(藪鼻宿)の継立場・旅館整備・拡充に関係しており、一説では寛政・享和(1789~1800)年間とも言われています。

諏訪神社



元文3年(1738)に創建され、祭神は建御名方富命(たけみなかたとみのみこと)と八坂刀売神(やさかとめのかみ)を祀る。境内には昔ながらの末社天神、稲荷、八幡も鎮座し、拝殿内には、江戸時代から前泉堂という筆学所(寺子屋)を設け周辺農家の子弟を指導した矢沢保光(玉秀)の武者絵が掲げられている。

寛政8年(1796)に梵鐘^{ぼんしょう}が铸造され鐘楼が建立されましたが、第二次世界大戦の金属回収で、昭和十九年供出されてしまいました。そこで昭和五十年十二月に新しく梵鐘が铸造されました。梵鐘の銘にこの経過が詳しく記されている。